

第3回あらかわ俳壇

投句数	301句
投句者数	77名
兼題	星月夜、美容、ぶどう、花野
選者	佐々木忠利氏(荒川区俳句連盟会長)
期間	平成28年8月1日(月曜)から9月2日(金曜)

特選	一房の葡萄両手に余しけり	竹野 美恵子さん
選評	葡萄は五、六月には房状の花をつけ、八、九月には房となり実が熟する。両手に余る一房の葡萄の量感である大きさ、重さがリアルに享受される。平明さを余情とした味覚の秋たけなわの存在感のある句となった。	
入選	ふと父母にゆき逢へさうな花野かな	松本光章さん
	剥落のつづく白壁花芙蓉	大久保須美子さん
	瀬戸内の黒き鳥影星月夜	小川一夫さん
	振り向けば花野を渡る風の精	水田京二さん
	弟に負けじとぶどう口に入れ	一色由美子さん

第4回あらかわ俳壇

投句数	501句
投句者数	104名
兼題	立冬、西の市、落葉、大根
選者	対馬康子氏(現代俳句協会副会長)
期間	平成28年11月1日(月曜)から12月1日(木曜)

特選	西の市この世の闇にのまれけり	柴田健次さん
選評	鶯神社の西の市は、煌々と華やかな熊手と人の熱気でまるで別世界です。この句は単に夜の暗さではなく、その明るい光の塊がすっぽりと、現代という時代の闇に飲みこまれてしまうような不安を感じます。	
入選	立冬や切り口白き薪を積む	大越源一さん
	足元を前頭葉に似る落葉	金沢寛さん
	白髪の人黙礼落葉揺く	土定弘積さん
	落葉降る意志あるもの如く降る	西村悦さん
	大根の詠へ向きの切られ様	戸矢晃一さん

第5回あらかわ俳壇

投句数	271句
投句者数	49名
兼題	節分、冴え返る、下萌、梅一切
選者	佐々木忠利氏(荒川区俳句連盟会長)
期間	平成29年2月1日(水曜)から3月1日(水曜)

特選	フクシマの静かな浜辺冴え返る	田中礼子さん
選評	フクシマの静かな浜辺に聞けば、ふり返す寒さを感じる様なあの3.11を思い出す。遅々として進まぬ復興への道のり、離れ離れになって暮らす家族や地域住民への思い、何時になったら本当の春が来るのか。作者の思いの深い句。	
入選	百幹の竹の静止や冴返る	大塚とき子さん
	下萌えの色に大地の息吹見ゆ	坂本久男さん
	節分の鬼給食を運びくる	高安政江さん
	下萌を踏む兄弟の秘密基地	吉本つま子さん
	老木の幹より清き梅一輪	若林清子さん